

賢い患者に なるために

① 納得するまで医者に説明してもらおう

② 心の支え 医療だけでは難しい

セカンドオピニオン外来を担当すると、つらいつく感じるごことがあります。「説明がいかにかに大切か」ということです。

セカンドオピニオンを求められる患者さんの6〜7割は受けてきた治療や医師に不満を抱いています。その最大の理由は、説明不足です。

受けている治療が「腑に落ち

ない」ままではなく、「落ちた」と思ってもらわなければなりません。30分から1時間ほどかけて説明すると、たいいていの患者さんは納得されます。主治医が行ってきた治療と同じ内容であっても、じっくり話すことで理解してもらえます。

診療する中で重要なことがあります。「その患者さんにとつてのキーパーソンは誰か」ということです。パートナーなのか、子どもなのか、それとも友人なのか。病気に寄り添ってくれるのは誰なのか。医療側は薬などを使ってその人を支えようとしませんが、気持ちだけは薬で支えることはできません。

がんとの付き合いが長くなると、いつかは冷静な人でも、「死」が脳裏をよぎって不安になることがあります。抗がん剤治療を受け、「何のためにこんなつらい目にあわなきゃいけないの」と自暴自棄になる人もいます。抗うつ剤を使わなければいけない人も少なくありません。

そんな時、医療だけで心のバランスをとるのは難しい。支えが欠かせないのです。病気がなった時、おのずとその人の生き様が現れます。人生観とか価値観とか、それまで考えなかつた人も少なくないでしょう。「生きていく中で考える



中村清吾 医師
なかむら・せいご 82年、千葉大医学部卒。聖路加国際

病院外科で研修後、93年に同病院情報システム室室長兼任。米テキサス州立大M・D・アンダーソンがんセンターなどで研修し、05年、聖路加国際病院プレストセンター長、乳腺外科部長。日本乳癌学会専門医。06年から聖路加看護大学臨床教授兼務。

機会をもらった」と思えるように。そのためには、がんのことを知り、心のバランスが欠かせません。「腑に落ちること」がその一歩なのです。

(続きはアスパラクラブで)